
普通戦隊 イッパンジャー

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通戦隊 イッパンジャー

【Nコード】

N4025T

【作者名】

つわの空

【あらすじ】

どこにでもいる、ごくごく普通の大学生だった俺が、レンジャーとして戦う事になった。

俺はどこにでもいる普通の大学生だ。ちなみに今2年生。毎日だらだら大学に行って、バイトして、遊んで。そんな感じ。そんな感じの俺だが、選ばれた、らしい。

朝起きた俺は、真っ先にその異変に気付いた。

「…なんじゃこりゃ」

枕元に、見覚えのない携帯電話が置かれていた。

「…あれ？俺どうしたんだっけ、これ」

ちよつとだけいじってみるが、特に反応はない。しかしよく見るとこの携帯電話、かなりチープな感じがする。なんかのおもちゃみたいなの…。

「お前はイッパンジャーに選ばれたんや」

ああそうそう、子供向けの特撮番組に出てくる機械みたいなの…

「つて、え！？」

俺が後ろを振り返ると、そこには虎猫がちよこんと座っていた。

「え！？何だどっから入ってきた！？」

「そっから」

猫が顔を振った方に目をやると、窓ガラスが綺麗に割られていた。

「おまつ…」

「まあまあ、細かいことはどうでもええやん」

猫は面倒くさそうな声を出すと、こちらに寄ってきた。

「ていうか俺、夢でも見てんのか？なんで猫が喋ってるの？」

「夢やないでー。わい、猫やないもん。虎猫やもん。普段はニャーって鳴くんやけど」

いやお前それ猫だろどう考えても。俺は内心で突っ込む。声に出すと、この猫はうるさく反論してきそう。そんな気がする。

「お前は一般人の中から、イッパンジャーのレッドとして選ばれた

んや。というか、見つけてしもたと言うか」

「どういうことだよ」

俺は時計を確認する。そろそろ大学に行く準備をしないと、講義に遅れる。あの講義はそろそろ真面目に出席しておかないと、単位を落とすかもしれない。

「イツパンジャーにふさわしい奴を選び、その『チェンジケータイ』を渡すのが、わいの役目や。で、わいがそのチェンジケータイを人間に託すと、怪獣たちの封印が解けてまうんや。だからお前はイツパンジャーとして、怪獣と戦ってくれ」

「…。このチェンジケータイ、誰にも渡さなきゃいいじゃん。そして怪獣たちも封印されたままなんだろ？」

俺は至極当然のことを言った。つもりだったが、

「そしたら誰がイツパンジャーをやるねん!!」

怒られた。

「いや、やらなくていいじゃねえか!!」

「何言うとんのや!!レンジャーは子供たちのあこがれやぞお前!

!!」

更に、背中に猫パンチされた。爪は出していなかったが結構いたい。

「滅多と見つかれへんのや!!お前ほどレッドにふさわしい奴は!

!!」

「え、それってどういう奴？」

俺はちよつと期待を込めて訊いた。ヒーローにふさわしい人間、だなんて。

「とにかくアホ丸出しのやつが、レッドにはふさわしい!!」

「なんだよそれ!!」

訊かなきゃよかった。ああ、早く準備しないと大学に遅れる…。

「とにかくほれ、戦うんや!!今この家の前でちよつど、怪獣が出現したとこや!!」

「ええ!?!」

俺は部屋の窓を開けて、下を見る。
確かに怪獣っぽい何かが、人々を襲っていた。その怪獣は手が力
二みたいで、それでなんか、なんか…
「なあ、あれってバルタンせいじ…」
「ええから、はよ行くで!!」
虎猫にせかされて、俺はケータイを持って外に飛び出した。

「そこまでや!!怪獣!!」

声を張り上げたのは俺ではなくて猫の方だった。

少し高いところに上った方が、登場するときかっこいいんや!と
かなんとか猫に言われて、俺は人さまの車の上に立っていた。レン
ジャーとして最低な気がする。この車の持ち主の人、ごめんなさい。
しかも慌てて飛び出た俺は、思いつきりパジャマ姿だった。恥ず
かしい。

「ほれ、お前、なんか続きを言わんかいな」

猫がこそつと俺に言う。しかし何を言えばいいんだ。えーと、え
ーと。

「お、俺たちが相手だ!!」

「なに言うてんねん。今日はお前一人や」

俺は眼を見開いた。ちよつと待て。

「お、おい!青は?緑は?黄色は?ピンクは?いきなり助っ人でや
つてくる黒は!?!」

「いまんとこ、イッパンジャーとして選ばれたんはレッドのお前だ
けや。せやから今日は、レッド一人で相手したるわこの怪獣!!!」

最後の方を怒鳴りながら、猫が言う。俺は猫をにらんだ。お前も
戦えよこの野郎。

「ほれ、そろそろ変身せんかい」

「え、どうやって?」

もちろんだが、俺は変身の方法なんて知らない。

「まず、右手を上にあげて!」
言われた通り、右手を高く上にあげる。

「こ、こうか?」
「んで、叫ぶんや。』今から変身するので10秒ほど待ってください!」
「い!」

「何宣言してるんだよ!しかも敬語じゃねえか!」
「そう言っとな、怪獣は待ってくれへんぞ!常識やる!」
お前は何も知らんのやな、と猫があきれた顔をした。
「テレビではカットしてるが、変身前はいつも怪獣に声かけてるんやで」

そうなのか。知らなかった。レンジャーも怪物もそんなに律儀だったなんて。

「はよ言わんかい!襲われるぞ!」
猫にせかさね、俺は大声で言う。

「今から変身するので、10秒ほど待ってください!」
怪獣の動きが止まった。本当に待ってくれる気がしない。なんて、律儀な。

「じゃ、さっさと変身せい!」
「だからどうやって!?!」
「まず、チェンジケータイの通話ボタンを押せ」
言われた通り、通話ボタンを押してみる。

『セツト』

「うわ、なんか言ったぞこのケータイ!」
「そしたら大声で叫ぶ!!へえ〜んしい〜ん!」
そのままじゃねえか。

「…へ〜んしい〜ん」

「ちやう!!もつと心をこめるんや!!へえ〜んしい〜ん!」

「…へ〜んしい〜ん」

「お前やる気あるんかいな!?!」
ねえよ。

「はよせな10秒経つてまうで!?!」

「そしたらまたお願いして、10秒待ってもらえばいいじゃねえか」
「あほう!?!そない恥ずかしいこと出来るかい!?!」

1回言うだけでも十分恥ずかしいと思うが。

「とにかく羞恥心なんてもんは捨てる!?!はよ言え!?!」

「…へえ〜んしい〜ん!?!」

『メイクアップ!?!』

携帯が何か言ったが、これは違う番組の決め台詞だった気がする。
とか思ってる間に、俺はあつという間に赤色の全身タイツ姿にな
っていた。頭には赤色のヘルメット。目の部分が黒い、お決まりの
やつだ。確かにこれはレンジャーだ。

「よっしゃ行け!?!こっから飛ぶんや!?!そしたらかつこええ!?!」
猫に言われて調子に乗った俺は、車から飛び降りた。

ぐきつ。

.....。

「…いつてええ!?!」

「阿呆!?!やられる前からなにを一人で捻挫してんねん!?!これや
からレッドはアホなんや!?!」

猫にそんなことを言われると、流石にカチンとくる。

「ちよつと待て!?!変身したことで、俺の身体能力が上がってると
かそんなんは!?!?」

「あるはずないやろ」

しれつとこの猫…。

「はよ戦え！！怪獣が襲つて来とるで！！」

そう言われて前を見ると、怪獣がこちらに向かって突進してきていた。

「おい！！なんか武器はねえのかよ！！剣とか銃とか！！」

「ある！！レンジャーなんやからあるに決まってるやる！チェンジケータイに向かって叫べ！！『武器をください』や！！」

「また敬語かよ！！」

「当たり前や！！低姿勢やないと、世の中やっていかれへんのだよ！！」

猫に諭されなんだか悔しい気分で、俺はケータイに向かって叫んだ。すると、

金属バットが出てきた。

「…ただの金属バットじゃねえか！！」

「お前、金属バットなめたらあかんで！これほど攻撃に向いてるものは、そうそうないわ！！」

「じゃなくてもっと、かっこいい武器はないのかよ！！剣とか銃とか！！」

「ないわそんなもん。だつてお前、一般人から選ばれたイッパンジャーやで？そんな大層な武器、使えるかいな」

仰るとおりですが。

「せやけどなレッド。そのバットにはお前専用のエフェクトがついとる」

「マジで！？どんなー！！」

「雷や」

「おお、かっこいいじゃん！どつやるん…」

ドカッ！！！！

俺は怪獣のパンチを、顔面にまともに食らった。

「ぶじっ！！！！」

「あほう！！よそ見してるからや！！」
仰るとおりですが。

「サンダーって叫ぶんや！！そしたらエフェクトが発動するわい！」
「サ、サンダー！！！」

言われた通りに叫ぶと、俺の金属バットに電流のようなものが走り、バチバチと音を立てた。

「お、おお」

「ほらな。その名も電撃イライラバットや」

なんかのパクリのような気がするが、ここは受け流す。俺はバットを構えて、怪獣の方に走っていった。狙うは頭だ。よくもさつきは殴ってくれたな！！

「親父にも殴られたことないのにな！」

ナイスタイミングで猫に突っ込まれつつ、俺は無我夢中でバットを振り下ろした。ひるむ怪物に容赦なく、次の一撃を与える。

それを見ていた猫が、ぽつりとつぶやいた。

「イッパンジャーの武器は全員バットやねん。で、怪獣1体に対して、お前から5人でバットでボコ殴りやる。…まるでリンチやな。かわいそうに」

「人聞きの悪いこと言うんじゃねえよ！！」

そうこう言っている間に、怪獣が白旗をあげた。

「え？」

「降参やて。もう許したれ」

それじゃ、なんか俺が悪いことしてるみたいじゃないか。怪獣は俺に向かってお辞儀をすると、そのままあたふたとどこかへ走り去っていった。

「…あれ？でかくなったりしないの？ロボットで戦ったりしないの？」

「そんな非現実なこと、あるかいな。それはテレビだけの話や」

今までやってたことも十分非現実だと思うが。

「という事で、今日からお前はレッドとして戦え！わいは残りのレンジャーを探してくるさかい」

「…いやもういいじゃん。戦わなくて」

「何言うとんねん！！レンジャーは子供たちのあこがれやぞお前！」

「またもや猫パンチされ、ヘルメットに傷がついた。この猫、案外強いんじゃないのか。」

「ほな、頼んだでイッパンジャー！！」

「そう言い残すと、猫は颯爽とどこかへ走り去っていった。」

「こうして俺は、子供たちのあこがれ「イッパンジャー」として、怪獣たちと戦うことになってしまった。」

「ちなみに、今回の戦いを見ていた人は、誰もいない。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4025t/>

普通戦隊 イッパンジャー

2011年5月20日09時10分発行